



大学図書館見学ツアーのご案内

テーマ：『秋の奈良！大学図書館見学ツアー』

奈良教育大学附属図書館／奈良女子大学学術情報センター』

概要：秋深まる奈良公園に隣接する二つの大学。
贅沢な時間を大学図書館で過ごしませんか？

※本ワンディセミナーは、大図研大阪支部との共催です。

開催日時：2014年11月29日（土）13:00-16:30（予定）

※終了後、プレ忘年会を予定しています（実費負担）

集合場所：奈良教育大学附属図書館前

近鉄奈良駅・JR奈良駅より市内循環バス（約10分）で高畑町（奈良教育大学）下車

<http://www.nara-edu.ac.jp/access/>

参加費：無料

共催：大学図書館問題研究会大阪支部

申込方法：大図研大阪支部 Web サイト

(<https://sites.google.com/site/dtkosakaweb/home/reikai/201411>)

からお申し込みください。

申込締切：2014年11月22日（土）[定員25名程度]

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

◆希望者のみ◆

10:00-13:00 奈良公園散策・ランチ

集合場所：近鉄奈良駅・東改札口前

[目次]

大学図書館見学ツアーのご案内	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー		
「公開！」関西ディスカバリー担当者会議 参加報告		
「公開！」関西ディスカバリーサービス担当者会議」に参加して	太田 仁	… 2
ディスカバリーサービスについて議論した一日	金森 悠一	… 4
ディスカバリーサービスをめぐるさまざまな「戦略」を考えながら	古賀 崇	… 6
支部委員 挨拶		… 7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com （大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大図研京都ワンディセミナー
「公開!」関西ディスカバリー担当者会議」参加報告**「公開!」関西ディスカバリーサービス担当者会議」に参加して****太田 仁**

「関西ディスカバリーサービス担当者会議」って、いったい何時発足したのだろうか？この報告を書くにあたりメールを探してみると、2012年の秋に「Subject: 次回 関西ディスカバリー担当者会議日程」というのが一番古く、「次回の内容としては福井大学の方の参加と...」と書かれているから、福井大学が参加したのは、数回目を降と云うことになるのか。私が参加させて貰えるようになってからの担当者会議は懇親会と云うイメージで、酒を飲みながら話をしていて、ときにディスカバリーに関係する話題で盛り上がるといった感が強く、とても公開できるものとは思えない。しかし、この春からディスカバリー導入の大学もちらほら出て来ているようで、導入までの苦労や導入後の利用者教育など、担当者に共通する悩みもあると思われるので、情報を共有し、ディスカバリーサービスのますますの発展のために取って担当者会議を公開することにしたようだが、これまでのように酔っ払いの戯言では流石に誰も聞いて呉れないだろうと思っていると、第1部に佛教大学飯野氏による「ディスカバリーサービスに図書館ができること」と云う講演があり、第2部として、「ディスカバリーサービスの担当者によるラウンドテーブル」として、担当者の経験が語られる構成になっていた。

第1部の飯野氏の講演内容について、概略をまとめてみたい。

最初にディスカバリー再考として、これまでは、何らかの情報へのアクセスや特定の情報を得るためのサーチに力点をおいた過程を重視するシステムが主流であったのが、集めた情報をどう利用するか、そこから何を発見するのかという結果に力点を置いたシステムに変わってきたことが述べられ、学術情報の扱いに不慣れな「初心者」と相当に習熟した「上級者」にとって大きな効果をあげていると言及されました。

「初心者」にはシステムとしての「アクティブラーニング」環境をもたらし、「上級者」にはシステムとして「ディスカバリー」のみならず「セレンディピティ」環境をもたらし、図書館としての新たな「パラダイム」であると考えられます。

日本でのディスカバリーサービスは既に50~60の大学で導入されており、全国800大学のうちの6~7%の導入率となります。社会学者ロジャーズの「イノベーションの普及モデル」でいうところの「Early Adopters」の段階です。この段階は普及に最も影響力がある段階で、図書館員はディスカバリーサービスの普及に最も重要な段階に差し掛りつつあることを理解し、利用者満足度を高め、かつ利用者の裾野を広げる努力が必要になって来ます。

具体的には、日本語コンテンツ充実に向けた取り組みを加速させることと、ディスカバリーサービスのパラドックスにある「中間層」へのアピールを行ない、中間層の利用者を上級者に押し上げることです。

続けて、日本語コンテンツ充実に向けた取り組みについて、日本国内のコンテンツについては、主要なものについては導入の動きが進行中であること、英語圏のコンテンツに比べ、日本国内のコンテンツの種類・資料タイプは豊富とはいえないと述べられました。言語別メタデータの量を見てみると、日本語コンテンツは既に世界第4位のメタデータ量があるが、図書目次、新聞記事、公文書や音声・映像データが少ないそうです。

また、現在のコンテンツ収集アクションはライセンスを中心に考えると「商用データベース」へのアクションが中心で、スクレーパビリティから考えると「Global/Web-Scale」へのアクションが中心とのことでした。

コンテンツの対応が進まない理由として、コンテンツベンダーがディスカバリーサービスをよく知らないため、ライセンス面や技術面等への懸念があって、ビジネスモデルの構築に踏み切れていない点が挙げられ、図書館からコンテンツベンダーへのアプローチが必要であると語られ、アプローチ例の紹介がありました。図書館からの働きかけにより、「価値あるデータベース」→「メタデータのディスカバリーへの提供」→「ディスカバリーの利用者増加」→「データベース本体や他のデータベースの利用を導く」→「メタデータを提供したデータベースの価値を再認識」→「データベース契約の続行」→「価値あるデータベース」と云う正のスパイラルに持って行く必要があります。そのためにも、図書の目次情報のように現在ディスカバリーサービスにメタデータが存在しないが需要が見込まれるものについては、積極的にベンダーに働きかけることも必要と述べられました。

次に、利用者の認知度を高めることが、学術情報の扱いが「中間層」に属する人を上級者に引き上げることがディスカバリーサービスの据野を広げることになり、長期的な視点に立った持続可能な運営に繋がるとして、佛教大学で取り組まれた図書館ガイダンスの事例が紹介されました。

そして、海外で日本語コンテンツがどのように見えているかをミシガン大学の学内環境で検索した事例を基に示されました。日本語のメタデータ件数は中国語・朝鮮語に比較して少なくないが、日本語の語彙で検索を掛けても、中国語・朝鮮語のコンテンツに埋れてしまっているとのことでした。

最後に図書館職員が認識すべきこととして、

- 1) ディスカバリーサービスは単なる検索システムではなく、それ以上のポテンシャルを秘めており、日本語コンテンツの拡充は、日本国内のみならず、海外における視点で考えても重要である
- 2) 図書館員はディスカバリーサービスの認知度を上げ、日本語コンテンツを拡充するために積極的にコンテンツベンダーへアピールしていく必要がある(ディスカバリーベンダーのみに任せではいけない)
- 3) 図書館員はディスカバリーサービスの利用者を増やすことで、持続可能なサービスとしてディスカバリーサービスを位置づけられるようにするべき
- 4) 業務改善や違った視点からもう一度ディスカバリーサービスを捉えてみると、そこにも新たな「思いつき」、つまり図書館にとっての発見(ディスカバリー)が生まれ、図書館がやるべきことが見えてくる

と締め括られました。

第2部の担当者ラウンドテーブルは、いつもの座談会の雰囲気。「皆さん楽しんでますか？ 私達は楽しんでます！」と司会者が参加して下さった人を気使うくらい、壇上のラウンドテーブル担当者達は楽しんでた。これが関西ディスカバリー担当者会議の常。何時温泉談義に花が咲くかと思ってみたり。そんなわけでメモも取っておらず、細かい内容を書くことができない(汗)。

ラウンドテーブルの項目は以下の通り。

- ・ファセット検索は利用者に浸透しているのか？

- ・ディスカバリーサービスのターゲットは誰か？
- ・図書館員はディスカバリーサービスを理解しているのか？
- ・導入前後で何が変わったか？
- ・契約形態で安くする工夫できないのか？
- ・HITすることは果たして良いことか？
- ・ディスカバリーサービスの次のテーマは何か？

質疑応答では館種を超えて活発な意見交換が行なわれ、ディスカバリーサービスへの関心の高さが感じられた。

そしてメインの懇親会へと会場を移したのであるが、歩いている間にも参加者の気分が高揚して行くのが感じられた。席に着くと同時に最高潮に達したまま制限時間を超えても止まることを知らず、最終的に店を追い出されて散会となった。

おおた ひとし (福井大学附属図書館)

小特集:大図研京都ワンディセミナー 「公開！」関西ディスカバリー担当者会議」参加報告

ディスカバリーサービスについて議論した一日

金森 悠一

6月21日(土)に京都支部の共催企画として開催された「公開！」関西ディスカバリーサービス担当者会議」に参加しました。私の勤める大学がこの4月からEBSCOディスカバリーサービス(以下EDS)を導入したということもあり、今回は聴講ではなく、発表側の参加となりました。とは言いつつも、私のEDSとの関与はサービス担当者として利用説明を行うぐらいで、導入の経緯などは委員会や契約関係資料の回覧などで見聞きした程度です。ディスカバリーサービス(以下DS)担当者会議有志の皆様が様々なお話をされるのを、半分以上聴く側の立場になって感心しながら聴いていました。本稿では、私の勤め先の状況についても織り交ぜながら、会議の内容について紹介したいと思います。

今回の担当者会議は、2部構成となっていて、第1部は佛教大学の飯野さんによる「ディスカバリーサービスに図書館ができること『イノベーションの普及モデル』の視点から」というタイトルで、DSの現状について講演が行われました。

現在の問題点として、コンテンツの偏り、特に日本語のコンテンツの少なさについて紹介がありました。佛教大学のSummonでは、日本語のコンテンツ割合が英語、ドイツ語、中国語に次いで4位で、全体の3.5%程度しかないそうです。また、英語では論文や図書データに限らず、図書目次、新聞記事、公文書、写真、映像、音声など多彩なコンテンツがあるのに対して、日本語のコンテンツにはこれらのものが決定的に欠けているため、補完していく必要があるということでした。海外のデータベース(以下、DB)で漢字の検索を行うと、検索上位に上がってくるのはほとんど中国、韓国のメタデータだそうです。これは、中国や韓国の大きなDBは契約していても、日本のDBは知名度が低く、契約されていないのが原因のようです。また、日本のメタデータの内容の薄さも要因となっています。

DSへのデータ提供についてコンテンツベンダーの担当者と話をすると、心理面・技術面・ライセンス面・金銭面でDSへのデータ提供に踏み切りにくいようです。たとえ

ば、英語での交渉が大変、そもそも API の提供が遅れている、収益が確保できるのか不安、などが要因としてあげられるようです。何よりも、コンテンツベンダーにおける DS の認知度の低さが問題のようで、担当者と話しても、「初めて聞きました」、「名前を知っていましたが、そんなサービスだったのですね」、という声が聞こえてくるそうです。データベースの担当者になった際には、積極的に営業の方に説明をしていくことが重要です。

休憩を挟んで第 2 部からは、佛教大学の飯野さんに加え、大阪大学坂本さん、福井大学太田さん、同志社大学原さん、立命館大学安東さん、そして私の 6 人が前に座り、様々なテーマについて、ざっくばらんに語り合いました。ここでは、その中からいくつかご紹介します。

[ファセット検索は利用されているのか?]: Summon では Google Analytics を利用して統計を取ることが可能で、佛教大学では統計を取っているそうです。正確な数値は聞き逃してしまいましたが、年々増加し、大体 2 割弱ぐらいの利用率のようです。よく使われているのはフォーマットや出版年、主題など。ちなみに、国立国会図書館サーチのファセット検索も 2 割程度の利用率があるそうです。ただし、ファセット検索をもっと使ってもらうためには、メタデータが充実していることが重要で、OPAC のデータの登録も行っている場合なら、目録に主題をきちんと入れる努力が大切なようです。なお、ファセット検索の統計ではありませんが、本学の利用状況はログイン回数と詳細画面表示回数がほとんど 1 対 1 のため、目的の論文を 1 回検索して終わり、となっているように見受けられました。

[DS の主なターゲットは?]: 初学者に e リソースをもっと使ってもらいたいという意見がありました。ただ、利用してもらうには検索可能な日本語コンテンツの量が少ないのが問題のようです。統計上では、日本語での検索の割合が非常に高く、佛教大学では月によっては 9 割超、九州大学では 6 割程度が日本語での検索だそうです。また、教員の方が反応が良いという意見もありました。普段活用しない専門分野以外のデータベースから気になる文献を発見できたというコメントをいただいたそうです。なお、本学は図書館長に積極的に関与していただき、FD 研修会や教授会などで紹介する機会を得て、教員の方々への認知度が高くなりました。また、5 月 21 日には EBSCO 社の講師の方を呼んで講習会を実施し、教員 12 名、学生 3 名の参加がありました。

[検索結果が多いことはいいこと?]: 検索結果の関連度がどのような基準で検索しているか、ブラックボックスになっていて関連度に関しては信頼性が曖昧のようです。質を担保するためにも、検索結果の提供元をきちんと確認するよう、指導する必要があるということでした。また、利用者は表示順も気にしているようで、Excel のように複数条件での並び替えはできないのか、OPAC の新着順にしてほしい、などといった意見もあったそうです。

[DS 導入費用を安く出来ないか?]: 私はこの話題についてお話するために呼ばれた、と思っています。本学は、大阪教育大学、奈良教育大学の 3 教育大学でコンソーシアムを組み、EDS の契約を行っています。それによって、通常の価格よりもかなり安い価格での導入が可能となりました。ただし、本学に限って言えば、EBSCO 社より一昨年からいくつか案を提示していただいております、その価格と比較して割引は 5%程度でした。しかし、コンソーシアムは導入費用を安くする手段としては一考の価値があるのではないのでしょうか。

また、質疑もいくつか行われましたが、その中で、図書館として利用者の DS の利用にどこまで関わって行くべきなのか?という質問がありました。検索した結果についてそれを評価する場合、それがどんなデータベースを参照にしたどういった由来のデータなのかについてアドバイスをしたり、そのデータが明らかに間違っている場合には指摘する必要があります。しかし、基本的には専門分野について利用者の方がその内容に精通しているためその研究内容の妥当性の判断は利用者にお任せすべき、という答えができました。

今回の会議を通して DS に関して様々な議論が繰り広げられ、改めて現状や課題について考える機会を得ることができました。本学もまだ導入したばかりですので、これから利用状況の評価や認知度をあげるための工夫などをしていく必要があると考えています。

かなもり ゆういち (京都教育大学附属図書館)

小特集:大図研京都ワンディセミナー
「公開!」関西ディスカバリー担当者会議」参加報告

ディスカバリーサービスをめぐるさまざまな「戦略」を考えながら

古賀 崇

筆者が今回の「公開!」関西ディスカバリーサービス担当者会議に参加した理由は2つある。ひとつは、今年度から本学内の「学術情報委員会」の委員長を務めることとなり、その職務に、学内向け図書館である「情報ライブラリー」(学外にも公開している「天理図書館」とは別)の運営に関する諸事項が含まれること。もうひとつは、前の点と密接にかかわるが、本学で今年4月よりディスカバリーサービス「Summon」を「TAF Search」(1)の名で導入したことである。いずれにせよ、ディスカバリーサービスの導入・運営の「先達」である各校の担当者からの生の声を聞き、本学のディスカバリーサービスの運営、またそれを活かした教育・研究活動につなげられれば、という思いを抱きつつ、会場に足を運んだ。

今回の会議への参加を通じて実感したのは、ディスカバリーサービスの今後の学内への浸透、またサービス自体の充実のために、さまざまな「戦略」が求められる、ということである。またその「戦略」もいくつかのレベルがあり、学内で対処すべき戦略もあれば、各大学図書館からベンダーに向けて発信・対処すべき戦略、さらには国全体の学術情報政策の形成につなげていくべき戦略などが考えられる。(なお、今会議では「公共図書館におけるディスカバリーサービス導入の可能性」についても会場からのコメントがあったが、本稿では大学でのディスカバリーサービスに絞って論じたい。)

まず「学内での戦略」に関して述べると、ディスカバリーサービスが文字通りどのような「発見(ディスカバリー)」を利用者にもたらし、教育や研究に寄与しうるか、という点を大学全体に理解してもらう必要がある。問題は、その担い手は誰か、ということになるが、これは学内の事情で変わってくるだろう。ひとつの可能性としては、ディスカバリーサービスに直接携わる図書館職員らが、教員にその効果—特に「関連度順」の検索結果の表示など、「情報や資料の新たな探し方」の提示—をアピールし、その教員が学生にもディスカバリーサービスの活用法を伝える、という道筋が考えられる。今会議では「ディスカバリーサービスに関連する講習会の工夫」が今後の重要な課題のひとつに挙げられたが、各大学の講習会などの実例を共有する場が今後設定されることを希望したい。図書館員だけでなく、教員や学生らの意見や体験を共有する機会も望まれるだろう。

続いて「各大学図書館からベンダーに向けて」の戦略に関しては、「より多くのコンテンツを、いかにディスカバリーサービスに取り込んでいくか」について、ユーザーとしての図書館などから活発に意見を出していくことが求められる。筆者自身が本学の「TAF

Search」を使って実感するのは、例えばジャパンナレッジ上の各コンテンツ（日本大百科全書、国史大事典など）が「TAF Search」に反映されることによって、「調べるきっかけ」を学生に説明しやすくなった、という点である。一方、ウェブ上の有用なコンテンツをディスカバリーサービスに反映させる余地はまだ多くあり、今会議では一例として「アジア歴史資料センターにおける公文書のデータ・画像」が具体的な候補のひとつに挙がっていた。会場からも意見があった通り、図書館・文書館・博物館・美術館などの垣根も越えつつ、ディスカバリーサービスを通じてより多くの有用な資料を「見える化」するための提言を、ユーザーの側から効果的に提示していくことが必要と言える。

最後に「国全体の学術情報政策」に関する戦略に関し、大いに考えさせられたのが、飯野氏が紹介された海外のディスカバリーサービスに関する事例である。つまり、文学であれ政治的なものであれ、日本語のことばでディスカバリーサービスを検索しても、上位に出てくるのは日本以外の国でつくられたコンテンツが多い、という実態があるという。この点は、江上敏哲氏が著書『本棚の中のニッポン』（笠間書院、2012）（2）などでしきりに問題提起している「デジタル化した日本語資料は、海外ではどれだけ活用できているか、また“世界の情報のメインストリーム”にどれだけ乗れているか」ということと密接にかかわる。こうした論点も国の政策の流れにうまく乗せられるよう、「現場からの提言」を効果的に発信していかなくてはなるまい。

以上、さしあたり3つのレベルの「戦略」について述べたが、これらは相互に密接に結びついている。ディスカバリーサービスをひとつの契機としつつ、学内から国際的な観点に至るまで、「デジタル環境の中での情報の発見の仕方・発見のされ方」を大局的に考えつつ、図書館などでのよりよい実践につなげていく必要がある。このことを、筆者自身の学内での取り組みにおいても、意識していきたい。
（なお、本稿の意見はあくまで筆者個人のものである。）

(1) 単独のサイトとして開設されている (<http://tenri.summon.serialssolutions.com/>) ほか、本年4月よりリニューアルした本学のOPAC「TEA-OPAC」からも、検索の入口のひとつとして利用が可能 (<https://opac.tenri-u.ac.jp/>)。

(2) 筆者による書評（『アーカイブズ学研究』No. 19, 2013, p. 96-101.）もあわせてご参照いただきたい。

こが たかし（天理大学人間学部）

支部委員 挨拶

大図研の年度は7月で替わります。2014年度の支部委員は10名です。例年は支部委員一人ひとりから挨拶していますが、今回は各担当の代表者が挨拶させていただきます。今後もより一層京都支部が盛り上がるよう支部委員全員が一丸となって頑張ります。これからも大図研京都支部をどうぞよろしく願いいたします。

● 研究企画（安東 正玄）

ここ数年の大学図書館の大きなテーマとしては、「学習空間としての図書館」へのシフトでしょう。その中で、学生の主体的な学習を図書館がどうサポートするかが、問題になってます。

この「主体的」というのはくせもので、押し付けてもうまく行きません。ラーニング

コモンズの考え方にもあるように、学びあう姿を見せ合う事が次の学びを刺激し、ひいては「主体的な学び」へとつながる考えも指摘されています。当然、その流れに乗りながら大学図書館としても新しい取り組みを進めているところも多いと思います。

さて、本題です！「主体的な学び」を学生に求めている大学図書館ですから、私たちが「主体的」であることが大切です。「主体的」に取り組んでいる大図研に少しでも多くの方に参加して、刺激し合い、次の学びへとつなげていきませんか？あなたの参加をお待ちしています。

あんどろ せいげん (立命館大学図書館管理課)

● 支部報編集 (坂本 拓)

私が京都支部の支部委員をさせていただくようになってから8年経ちましたが、その間に私たち大学図書館職員を取り巻く環境が、大きく変わったように思います。

いわゆる団塊の世代の先達の皆様のご退職されたことによって職員の平均年齢が下がり、正規職員が大幅に減り非正規の雇用形態が増加したり、といった点が真っ先に思い浮かびます。

これらの状況の変化によって、大図研京都支部が、従来から果たしてきた役割である、「支部会員の相互の交流・情報交換の促進」が、これまで以上に重要になったように感じます。

支部会員のみなさまのもとに、必ずお届けできる媒体である支部報を通じて、よりいっそう、この「支部会員の相互の交流・情報交換」が促進できるよう、微力ながら努めたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

さかもと たく (京都大学附属図書館)

● 支部報印刷・発送 (山下 ユミ)

本年度は支部報印刷と発送のチーフを担当させていただきます。

このチームでは、会員の皆さまとの直接のコミュニケーションツールとしての支部報を、きちんと整えてお届けできるよう粛々と進めていきたいと思っています。

支部報の印刷発送作業はたいてい3名以上の支部委員が集まって行っていますが、皆様のお手元に無事届く祈りつつ、印刷をしたり封筒に詰めたりといったアナログな作業を和気あいあいと行っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

やました ゆみ (京都府立医科大学附属図書館)

● 組織・財務 (野間口 真裕)

早いもので、京都支部で支部委員6年目となりました。

後任に道を譲ろうと願いつつも叶わず、今年度も組織財務の主担当を継続させていただくこととなりました。

全国委員会にてワーキンググループの設置が決定し、「会員組織」や「会費徴収」のワーキンググループが設置されることとなりました。今年度以降、支部の組織・財務についても様々な変化があるかと思われます。

支部や関係者の皆様にとって、よい方向となるようこつこつと変化を支援していければと考えております。

どうぞ今年も1年なにとぞご意見・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

のまぐち まさひろ (京都大学附属図書館)

● メールマガジン (山上 朋宏)

今年度もメルマガを担当させていただきます。

メルマガを通じて少しでも皆様には有益な情報をお届けできるよう努めていきたいと思
います。

メルマガでは支部委員会の議事録や京都支部のイベント以外に毎月図書館関係のイベ
ントの案内をさせていただいております。こちらは支部会員の皆様からの情報提供も大
歓迎ですので、紹介したい図書館関係のイベントがありましたら、kyoto@daitoken.com
までお知らせください。メルマガで紹介させていただきます。

1年間どうぞよろしくお願いたします。

やまがみ ともひろ (京都大学経済学部図書室)

● Web サイト・ML (金森 悠一)

Web サイトおよびMLの管理を担当させていただきます。

先日、ML ゆりかもめの調査を行い、管理から漏れていたメールアドレスの整理を実
施しました。ご協力いただいた方、ありがとうございます。また、現在ゆりかもめの
登録をされていない方も、この機会にどうぞ登録ください。

Web サイトにつきましても、前任者から引き継いでもう4年が経過しました。少しず
つ内容の変更にも着手していければと考えております。今すぐにとはまいりませんが、
温かく見守りいただければ幸いです。

本年度もどうぞよろしくお願いたします。

かなもり ゆういち (京都教育大学附属図書館)

予告

2015 年近畿3支部新春合同例会

2015 年は京都支部が担当になっている新春合同例会ですが、下記の日程で学生との協
働をテーマに、鋭意企画中です。どうぞご参加ください！

日時: 2015 年 1 月 10 日(土) 午後

会場: キャンパスプラザ京都



◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2014年度（大図研会計年度2014.07－2015.06）に入っておりますので、2014年度の会費の納入をお願い致します。また、2013年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000＋京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部（kyoto@daitoken.com）まで。